

編集委員会委員

湧口清隆

YUGUCHI, Kiyotaka

相模女子大学人間社会学部社会マネジメント学科教授

## 1. はじめに

本誌第16巻第2号の本欄において、(一財)運輸政策研究機構理事長の春成誠氏が「読者の視点から」というタイトルで本誌のあり方について論じている。同氏は、本誌が学術誌と広報誌とを兼ねた役割を担っていることを踏まえ、各部分の内容に対する希望や編集方法の改善点を指摘している。通常の編集委員会では各号の編集作業に関する議題や報告で終わってしまうため、本誌のあり方や編集方針についてゆっくり検討し議論することはほとんどないだけに、委員の多くがこのメッセージを重く受けとめたと思う。

そこで今回は、学術誌の編集という立場から、僭越ながら、査読者としてどのようなことを感じ、悩み、考えているのかを述べさせていただきたいと思う。私は、本誌の編集委員として2年余りの間に主査を数回引き受けさせていただいているほか、国内外の学会誌、研究誌などの査読も多数担当してきた。以下に述べる点は、本誌固有の問題ではなく、商学、経済学関係の査読一般について、私が日々感じていることとしてとらえていただきたい。

## 2. 大学院生数の増加と投稿本数の急増

文部科学省は毎年「学校基本調査」を実施し、その結果を公表している。このデータをもとにした同省の資料によると、平成24(2012)年度の修士課程と博士課程に在籍する大学院生数はそれぞれ168,903人と74,316人となっており、交通分野の研究者が含まれると思われる人文科学系は12,451人と6,456人、社会科学系は18,334人と6,693人、工学系が70,614人と13,741人である。このほか、専門職学位課程に20,070人が在籍する。修士課程と博士課程の在籍数は平成16(2004)年度以降ほぼ横ばいで推移しているが、平成4(1992)年の修士課程76,954人と博士課程32,154人と比べると在籍者数は2倍以上に膨らんでいる。

かつては「博士課程修了」とは、博士課程の単位を修得したに過ぎず、国内のとくに文系の場合、大学等に就職後さらに研究を重ねて、40、50歳代になって博士論文を執筆し「博士」となった。ところが、平成3(1991)年に始まった文部科学省の大学院重点化政策の中で、2000年代に入ると博士課程修了と同時に「博士」号を取得する流れが加速した。「博士」号は、研究者として立ち立ちできる一種の「運転免許」の意味を持つようになった。ある意味、グローバル・スタンダードに合わされたと言える。

一方で、博士論文を提出するためには、標準3年間の博士(後期)課程在学中に少なくとも2~3回は学会報告を行い、査読付論文を確保しなければならない。査読期間や博士論文審査委員会の設置時期などを考慮すれば、事実上2年程度の間にこれらの発表、

論文執筆をこなす必要がある。結果として、大学院生自体にしっかりと腰を落ち着けて研究する余裕がなくなり、成果発表を急ぐ風潮が強くなってきた印象を受ける。併せて、投稿論文数も急増しているが、論文の問題提起として掲げた問題に対して十分な結論が出ていない論文も増えてきているように強く感じられる。

## 3. 査読者の視点~私の場合~

査読者により重視する視点は多少異なるであろう。私は、社会の現状を踏まえしっかりと問題提起が行われているか、そしてこの提起した問題に呼応する結論が明確に示されているかを最も重視している。これらは本誌の査読基準の「政策との関連性・実用的価値」、「論理性」及び「完成度」に対応する。また、執筆された論文がどのような点で学界や社会に貢献するのかが明示されている点も等しく重要だと感じている。公刊論文数が飛躍的に増加する中で、既存の論文に比べて何に「新規性」があるのかを示すことは、読者のためにも大切である。「新規性」を訴えるためには、政策や現象解明、研究手法に関するしっかりとしたレビューが存在し、それらと比較して執筆論文がどのように優れているのかが明示されていることが望まれる。そのうえで、論文が、「客観的」かつ「論理的」に書かれていることが求められる。しばしば要旨を書く段階で力尽きてしまった論文を見かけるが、読者のことを考えれば、「本稿は……を分析した。」だけではなく、「その結果、……であることが判明した。」まで要旨に明記して欲しい。

素晴らしい論文もある一方で、残念ながら多くの論文で上述の要素の一部が欠けているように感じられる。査読者は、これらの何が欠けているのかを著者に伝える役目を果たさねばならない。査読シートに記入した内容が、時としてうまく伝わらないこともある。意思疎通に失敗して、草稿が逆に改悪されてしまう場合もある。その時には、「なぜきちんと直さないのか」と思うよりも、執筆者にうまく伝えられず「本当に申し訳ない」と感じてしまう。

## 4. おわりに~編集者の立場として~

編集者として一番困るのは、再査読後に査読者の一部から「掲載不可」という回答が返ってくる時である。この査読者の意向を無視する訳にもいかず、上述の大学院事情を考えれば、何とか論文が掲載されるように頑張らなければならない。「掲載不可」とした査読者の真意をきっちりと探り、執筆者に再修正をお願いしなければならない。その結果、論文審査期間が長くなってしまい、読者にやや時機を逸した情報を提供することになったり、執筆者を焦らしたりすることになってしまい、心苦しい限りである。